才能ある子どもの旋律

――児童文学は音楽をどう描いているか――

横川寿美子

一

これからこの稿で取り上げるのは、物語の中で音楽が重要な役割を果たす、比較的最近に書かれた日本の児童文学およびYA文学である。これらについては特に決まった名称もないようなので、とりあえず〈音楽もの〉と呼んでおくことにするが、この〈音楽もの〉は、私の見たところ、ざっと二つのタイプに分けられる。

一つは、特定の歌や曲を物語の大きな要素として作品中に組み込んだもので、たとえば森絵都の短編集『アーモンド入りチョコレートのワルツ』（講談社　一九九六）などがこれに当たる。ここに収められた三つの短編は、それぞれに実在するピアノ曲をモチーフに構成されているが、共通点はそれだけで、あとは登場人物の年齢も作品のテーマやストーリーもまちまちである。取り上げられるのは、第一話がシューマンの「子供の情景」、第二話がバッハの「ゴルドベルグ変奏曲」、最後がエリック・サティによる表題作と同名の小曲。第一話では五人の少年たちが送る夏休みの日々が綴られ、最終話ではサティその人を彷彿とさせるフランス人の中年男性が登場する。

普段からこれらの曲に親しんでいる読者は、頭の中にそのメロディを響かせながら一つひとつの物語を読むに違いない。そして、それこそがこれらの話をより深く味わう読み方なのだろうが、その一方でこれらの物語は、たとえシューマンやバッハについて何一つ知らなくても、十分楽しむことができる。言うまでもないことである。

しかし、それでもなおこのタイプの〈音楽もの〉を読む者は、ある意味で自身の音楽経験を問われることになるには違いなく、そのせいか、大人向きの音楽小説にはよく見らるこのタイプの作品は、児童文学ではいたって少数派であるようだ。また、このタイプが読者に要求する、曲のタイトルから何らかのメタファーを読み取ったり、提示された曲のイメージをストーリーと絡み合わせながら読む、といった行為の抽象性も、子ども読者にはハードルが高いと見なされて、敬遠されるのかもしれない。

そこで、第二のタイプの〈音楽もの〉が浮上してくるこ